

三木哲学に対する覚書

加藤 正

唯物論の現実形態が問題なのである。——マルクス主義の世界観に二元論的なるものを附与したと称せられる『新人』三木清氏がこんなことを主張するとき、吾々は彼からどうせ碌でもないことを聞かされるものと覚悟してもまず差支なからう。さて三木氏が彼の主宰する『新興科学の旗のもとに』の第二巻第二号に寄せられた『唯物論とその現実形態』なる論文は、彼の本質をさらけ出した極めて有意義な文献である。彼のこの論文における全努力は一にかかつて唯物論の公式（曰く——自然的存在は精神的なるものの根源である）を跨ぎ越えることにあるのだが、実は佐伯俊平氏が『マルクス主義講座』に寄せられた労作の中でこの公式を彼にブチつけたことが、彼にこの任務の遂行を迫ったのによるのである。三木氏の唱導する哲学が現実形態におけると否とに拘らず苟もそれが唯物論ならば、唯物論の公式——然り、三木氏自身も承認している通り、唯物論がよつてもつて唯物論たるところの原理、歴史上のありとあらゆる唯物論の通有する『一般的基本命題』——を何らかの形で充たさねばならない、然るに三木氏はこの原理的な規定の意味を分析し、その基礎の上に合致する如く自己の哲学（唯物論の現実的部分！）を展開することをせず、かかる規定は抽象的非現実的としておっぼり出し、別に『人間の存在と自然の存在との動的相関的統一』なる基礎に合致せしめられた歴史的現実的な唯物論なるものを提唱する——これが佐伯氏によって告訴せられた三木氏である。そこでこの『何とかの何とかの統一』を氏の理論体系との連絡において分析し、それが唯物論とは別な観念論の精神によって裏打ちせられているものなることを論証できれば、佐伯氏が問題とした限りで

の三木氏征伐は成功した訳であるのだが、彼は肝心のところで少々不手際な類推を用いて単純に抹殺しようとしたため、折角せつかくの試みも積極性を欠いて不徹底に終わったようである。だから三木氏が佐伯氏から、唯物論の原則をくぐり抜けて観念論に滑り込むものだ、と云われたのが気に喰くわなければ、何をおいても彼は『抽象的一般的な原則』から彼の『歴史的現実的形態』にまで発展して来た理論的経路を個々の環の全体に亘わたって分析して見せてくれなければならなかったのである。理論的素性すじょうの曖昧な提唱は、哲学が一の学問であつて謔言せんげんではない限り、信用する訳にはゆかぬ。『理論の系譜』は何よりも三木氏の理論そのものについて確められなければならぬ。彼は常に反対者が『分析的でなく宣託ま的である』ことを非難している程の人物だから、この点の分析のみを回避するのは——もしくはもつと善意にとつてこの点の『分析究明』が彼の意識に上らなかつたか、或いはむしろ彼がこれに本質的な意義を見出すことができなかつたのは、とりも直さず彼の存在の観念論的、性格を証明してあまりあるものである。彼は彼の素性すじょうの知れない頭の中で意味づけられた、一定の範疇はんちゆうから無批判に出發する。この範疇はんちゆう（『何とか的統一』）が自然（物質世界の相互関係の全体）のうちにおいて占める地位の考究、即ちこの範疇はんちゆうの客観的意味の吟味、従つてまた勝手な意味づけからこの範疇はんちゆうを解放することをもつて出發するといふ唯物論の公式のつとに則したがつた行き方は全く彼の存在の外にある。

総じて三木氏の立論の全秘密は、特殊と普遍と、特殊的唯物論と唯物論の普遍的規定と、を媒介まに依よつて結びつける事を知らず、それらを弁証法的な統一にもたらすことができず、特殊を特殊として普遍から切り離して規定しながら、しかもそれは特殊である故に普遍を内包すると規定する点に存する。——即ち彼は、特殊によつて普遍を放棄し、そのことによつて逆に特殊をも没却してしまうあのブルジョア風の『現実主義者』のやり口と軌を一にする。三木氏がそれをやらなかつたと私が主張するところの『普遍と特殊の弁証法的統一即ち唯物論の基礎命題と現実的形態との内的発展関係の分析』とはどんなことか、別言すれば唯物論の現実形態は本来いかなる意味で語られ得

るかを明かにするために、先ず唯物論の定義（根本規定、基礎命題、普遍的原理）の性質の考察から始めよう。三木氏は『一定の定式を唯物論の定義として受取るにあたって、これらの事情を顧慮すべきである』としてそれらの事情を挙げている——一、真の定義は学問的研究の結果として初めて規定され得る。二、定義の仕方には研究の仕方が表現される。三、定義には定義する哲学者の立場が表現される。こんなことをいうのは、三木氏にとつては、佐伯氏がエンゲルスおよびレーニンから学んだ唯物論の定義がその根本規定でなくて、即ちすべての提説が唯物論たるためにはその根本において、必ず含まねばならない性質の規定ではなくて、ただエンゲルスおよびレーニンにとつてのみ妥当するという意味での歴史的規定であり、従つて現下の特殊の現実処しては別の規定によつて置き変わらねばならない事情にあるということを言おうがための予備行為である。

だがエンゲルスやレーニンにおいては、『これらの事情』は実際のところどうだったのか。三木氏はエンゲルスやレーニンにおける唯物論の定式は極めて限られた特殊事情——即ち反キリスト教の必要と当時たまたま会々隆盛をいたしたと三木氏が考えた自然科学にも一定の取引をつける必要!?——からのみ生れたと述べてそれで問題が片附いたと思つている。だがその生れるについてはもつともつと根本的な事情があるのを三木氏は御存知ないのだ。

人間の頭脳は幾千年の長きに亘わたつて、自己の実践の中に入つてくる個々の諸事物や諸観念を相互に結合して考察し、更に進んでは意識的にそれらを分析し、連鎖を辿たどり、綜合する、という仕事に従事して来た。思惟の種々なる活動はこの過程において培つちかわれた——或いは思惟の活動はこの過程の諸規定を負つて現われて来る。この精神的活動のうちに、夢と現実現象とを外面的に結びつけて神話を形成したような段階から、多少とも洗練された哲学的思索が専門化してくる。それは分析によつて精神（諸観念の相互連関）および自然（諸事物の相互連関）およびそれら相互の連関の種々雑多な関係を闡明せんめいし、それらの連鎖を辿たどつて総括し、種々雑多な思想体系として提出した。だから哲学者が彼の思想に一定の定式を与えるとき、彼の現実世界、精神世界に関する研究の結果乃至理解なほしの程度が

必然に表現せられるのは当然である。ある哲学者が精神的諸範疇^③、自然的諸範疇^④のそれぞれの因果的全連絡を発見し得ながら、この両領域の連絡のみは発見し得なかつたとき、彼は世界を交錯せざる二つの原因——自然のおよび精神的——から説明せざるを得なかつたとすれば、他の哲学者は両つの鎖^⑤が相互に対応することの洞察から、これらを別々の連鎖でなく、一つの原因に発する二つの鎖と見て、自然的原因と精神的原因とを一つに結びつけた。第三の哲学者達は感覚を媒介して両者を結合し、両者が唯一原因の両面ではなく、精神は自然の一面なる事を曝露した。また人間の行動の相互関係（歴史の内的連鎖）が生産力を媒介して自然的原因から説明され得たところでは、正義、理想、自由といったような観念的關係は歴史を貫く糸ではなく、歴史の一断面一所産にすぎないことを明かにした。哲学者が自己のために占有し得た諸々の事象の性質に依存して、哲学者が精神、自然、およびそれら相互の連関の諸形態に与えた定式は、夫々異^⑥っている。総じて後から出て来るもの程占有する諸事象は豊富となり、それらの連関形態の規定も益々詳細となり抱括的となつてゐる。吾々は自然（人間をも含めて）の個々領域内の連関に関する吾々の知識を豊富ならしめるものとして特に自然および社会の諸科学に感謝しなければならぬ。自然並びに歴史に関して科学的な大発見がある毎に、哲学は新しい推進力をうけた。だが哲学や科学の努力によつて事後的關係が詳細に分析され、実証的に立証され得た限りでは、それぞれの提説はもはや勝手に変更することはできない。そしていまもしこれに対して異議を称えようと欲する場合は、何らかそれを覆えずに足る新発見の事実をもつてこなければならぬ。そうでなければ折角の科学の革命家も単なる物笑いとなつてしまふ。一方自然と他方精神との間にもこの種類の確定的な關係が明かにされているだろうかを験^⑦べて見よう。この相互關係に関する二三の提説は既に述べた。この相互關係の探究において哲学史は問題の二つの脈を示している——即ち、一つは形式的に精神と自然との連絡点を中心とし、それだけの諸關係を取り出しての分析、他は内容的に精神と自然との間の全体的な対応的關係もしくは反映關係の探究である。前者は本来後者の關係の一要素である。それは一の特種問題として、後者から

派生したものである。ところで特殊研究として独立するや否や、それは特殊研究の一般的偏見を背負い込んでくるものだ——即ち部分たるにすぎない自己領域を全体と思ひ込む偏見である。この偏見は経験論から発して、実証科学、功利論、實用論等に共通している。だが吾々はいまそこまで一気に進む必要はない。経験論の功績は自然と精神とは感覺を媒介して結合するという点の闡明せんめいにあつた。とまれ感覺のうちには知のうちにもなしとの命題はライプニッツ、カント、フランス唯物論等のあらゆる思想に割り込んでゐる。そして今に到るまでこの事實を覆えずに足る新事實は発見せられていない。哲学史は、ここから直に例の偏見が頭を擡もたげている有様を示している。本来自然と精神との媒介としてのみ機能を現わす感覺は、一先ず他の諸連関から切離されて独立的な研究の対象となるや否や初心な素朴な人間によつて唯一の存在と考えられ、精神も自然も独立的存在たる感覺の存在の「存在の仕方」として理解されるに到るたるころなればそれは単なる特殊部門でなく世界觀の問題に突き入つてゐるのである。即ち彼は精神と自然との間の媒介を考察してゐるのでなく世界の説明原理を考察してゐるのである。——讀者はここで、研究者の主觀によつて意味づけられた範疇はんちゆうから出発するのでなく、この範疇はんちゆうの自然の上における地位即ち客觀的意味の吟味から出発するのが唯物論の公式にのつとつた行き方だと述べておいたのを思い起こしていただきたい。とまれ世界の説明原理は世界全体を分析した上でのみ発見できるといふのは確定的な事柄である。精神内の連絡様式、自然内の連絡様式を広汎に正確に分析し、各々の連絡の必然的な結論として兩者の連絡を規定する道を拓ひらいたのは合理論的思弁的哲学の功績である。自然、精神、およびそれら相互の關係の理解から種々な説明原理が発見せられてゐる。例えば先の例をとれば、自然を自然的原因、精神を精神的原因（我）、によつて理解することは材料の綿密な分析を予想する極めて進歩せる段階を表わしてゐるが、これらの原因がそれぞれ他方の領域の原因たることが確定し得ない場合は、世界の統一が要求される限り、諸原因の原因たる神が統一的説明原理として喚び出されねばならなかつた。世界の説明原理としての哲学史上の神々は、だが、研究の結果として発見され規

定せられるものである。そして当然研究の発展につれて種々な運命を見た。神という一様な名称のもとに種々な内容が意味せられた。人間が自己の道徳的目標としているような内容が神のものとして考えられている間は、この神によって説明される場合、真実においては「精神的なるもの」⁹によって説明されていたのである。神の内容から超越性と人格性が剥奪され⁹、¹⁰には自然の全体に外ならぬことが確定せられると、精神現象をもこめて世界全体を自然的原因から説明することが始まる。これが唯物論の名で呼ばれる世界観である。¹⁰ 哲学的思索が専門化した当初から、世界を自然的原因から説明しようとする努力があつた。その意味において三木氏が如何に抗弁しようとも唯物論は哲学と同様に古いのである。哲学の記録せられた創始者たるタレスは最初に、世界を自然的原因から説明する方法を発見した。そしてその後種々なる楔機をつかんで種々なる説明原理が提唱せられたが、それらは常に自然的原因の前に譲歩しなければならなかつた。自然的原因によつて説明する方法が容易に見出せないような領域からは絶えず別な説明原理があらわれてそれに反逆した。その最も強力なる保壘^{ほるい}は自然的原因から発する連鎖の最も遠い端に位する精神的存在である。例えば神——それはその理由によつて、超自然的のものとして自ら規定し、自然に對し貧弱な知識しかもたない人々の頭の中では、無限の内容を有する自然が、内容の少ない神の一部分と考えられる。だがこの神ですら始めは唯我^{ゆいがどくせん}独尊的にカツ歩するが、自然に對する知見を広めるにつれて、自己の限界を覺り始め、スコラ哲学がアリストテレスをもつて小細工したように、自然的原因による系列に譲歩し始める。既に万有神論は神と自然とは内容同一なるものと宣言した。その後で神は当然世界の説明に不要なものとして廃棄せられなければならなかつた。これは確^{たしか}に神の規定の仕方が間違つたのであろう！ カントも神の本体論的証明による規定に不満足を表明せねばならなかつた。そこで別な規定の仕方を見出さねばならぬ。神を精神的連関の原因たる我によつて規定し、我の活動、精神的連関、のうちに樹^たて直すことこれである。カント自身は知らなかつたようだがこの方法は神の超越的威力が大部あやしくなつて来たルネッサンス期から既に萌芽していた。この我もまた最初

フイヒテ的独自の振舞つたがドイツ観念論の発展が示しているように、結局自然には抵抗出来ないことが分つた。フオイエルバッハが我の内容を自然的、歴史的所産としての人間の反映だと喝破したのは当然の結論である。尤も彼は、彼の田舎生活によつて狭められた視野と性急な結論とのために、諸種の楔機の分析において不充分さを示し、自然的原因から歴史的人間までの発展の段階を（特にそれが歴史に入つてからの段階を）充分に分析し追求できなかったのはかえすがえすも残念であつたが、それはマルクスおよびエンゲルスがやつた。従つてフオイエルバッハにおいては、殊にその歴史の説明においては、未だなお自然的存在の発展段階の中でその意味を規定せられていない素性不明な範疇がかなりの役割を演じている。そしてマルクス、エンゲルスに於てはじめて、吾々は、世界の説明のために、自然的存在の中には存しない範疇をたよりにする必要がなくなつたのである。精神が根源的でなくて自然が根源的である。世界は何らかの精神的存在から理解さるべきでなく自然的存在から説明さるべきである。かくして哲学および科学の探究が分析せられた事実に基づいて唯物論の公式を全世界の説明原理として、もたらしたのである。

さて吾々は、はじめに帰る。佐伯氏が三木氏に対して掲げた唯物論の定義は、三木氏の非難した如く、しかく定義に関する『これらの事情』の考慮を蹂躪しているであろうか——いふまでもなく否。

第一に、唯物論のこの定義は三木氏の理解した如く、単に哲学体系の類型的な分類をあれこれと思索するような『研究』によつて一まとめに類別せられた類概念の規定の如きものではない。それは世界に関する哲学的研究の全発展の成果を背後にもつていふところの哲学史的結論として、しかも世界理解の基本的方向の規定として、生れて来たのである。この結論は次のことを確定する。即ち世界の根源が自然にあること、この自然の発展のうちに準備せられた諸条件の複合の中から思惟する人間が生れたこと、この人間の自然との交渉即ち生産によつてその時々と与えられる諸条件は人間の社会的歴史的発展を結果すること、この過程に於て、思惟は人間の視野に入つてくるこ

の自然と歴史の諸断面を反映するが、漸次それら諸断面が総合せられ、結局右の自然から歴史への発展の諸段階が最初は部分的に^①、次いで全体的に^②順次に反映してくるということ。これが、三木氏にとっては単に抽象的形式論理的な規定としてしか理解し得なかつた唯物論の定義の具体的な意味である。

三木氏が、『事物がいかに定義されるかは、それがいかに研究されるかを現わす』といったのは、どういう意味か。この定義は、三木氏によって誤解された如く、唯物論をば己^{おの}がじし独特な研究方法によつて研究した結果生れた解釈乃至意味づけの如きものとは少々訳が違ふのである。エンゲルスおよびレーニンが擁護した唯物論の定義は、吾々が事物の研究に際して従うべき思维行使の方法を規定している。即ち、世界の哲学的研究の右の如き結論は、吾々に、事物の正しき認識は、次の如き方法でのみ達せられることを必然的に断定する。即ち、吾々は自身に意識されない諸原因から頭の中に植えつけられた諸観念や諸方法を踏み台として現実を理解すべきではなく、これら諸観念に対応する現実の諸事物を占有し、それら自身の相互聯結を自然的存在の展開に基いて闡明^{せんめい}し、その結果によつて頭の中の諸観念を修正し規定し、事物の關係と観念の關係とをより近似的ならしめる——即ち事物の認識を深めるべきである。ところで逆にいえば、かかる方法が応用された限りでのみ事物は正しく認識し得られたということもまた同時に哲学史は証明している。即ちこの方法のみが哲学史において絶えず發展し、自己の正当性を次々に確立していったのだ。かかる研究の仕方がとりも直さず、意識は存在の反映であり、自然（事物や出来事の連関）は精神（諸観念の連関）の根源であるとなす唯物論の根本定義において表現せられているのではないか。定義には定義する人間の立場が刻印される——と三木氏。大いに宜しい。そういう問題提起こそまことに得がたきものである。この唯物論の定義は、三木氏の如く、世界観を典型的にあれこれと分類して見たり、『他と対質』する目的から勝手なものに基礎を求めに行つたりするような『立場』から与えられたのではない。エンゲルスもレーニンも世界の變革を問題とする共産主義の指導者であることは明かだ。即ち世界の変更に世界の正しい認識を前提する。理

論は世界の成立と運動とのあらゆる条件と法則とを知悉ちしつしているときにのみ、この世界の変更を指導することができる。これが『立場』である。だが、世界の正しい認識は、右に特徴づけた唯物論の方法のみが約束している。世界変革のあらゆる条件と法則とを闡明せんめいし、それに向つて人々の頭を啓蒙すること、これが戦闘的唯物論の使命であり、この使命のために、吾々は、種々様々な思いつきな理由を持ち出して、唯物論の方法を清算し、世界説明の二千五百年の努力を通じて自己の地位を確立した自然的存在を斥けて他の効力不明な説明原理をもつて来ようとするものに対して、あくまで唯物論の根本規定を防衛するのである。佐伯氏の試みはいまだ不充分にしか展開されていないとはいへ、極めて有意義である。

さて三木氏にお尋ねたずしますが、佐伯氏の場合即ち吾々の現在においてはエンゲルスおよびレーニンの場合における右の『事情』のどれかがどう変わっていますか。

以上を要約して私はこういうことができる——事物や出来事に関する吾々の知識が豊富となればなる程、自然内の連関、精神内の連関、従つてまた後者が前者によつて決定せられる関係について、認識の一段階一段階において与えられる内容は変化を蒙る、と。三木氏が自己の保証として呼び出したエンゲルス、レーニンはこれ以外の意味で唯物論の形態変化を語っていない。唯物論の現実形態はこの視角からのみ展開さるべきである。唯物論は唯物論的な行き方で展開さるべきである。三木氏が呼び出したレーニンはその大著において唯物論の本質、変化即ち唯物論の否定と形態、変化とを特に区別することを要求し、何か『現代的』なる名目のもとに、唯物論の根本規定と違つた原理の上に自己の所論を提出するものを激しく非難したのではなかったか、——しかも単に正統派の責任上唯物論を防衛したのではなく、唯物論のみが真理の認識への道であるが故に防衛し、種々なる場合へその根本規定をあてはめて考察し、『唯物論的に思考する』ということに対して起されたる、また起され得る問題に説明を与えたのではなかったか。三木氏がレーニンを保証として呼び出したのは、猫が鼠を保証する程不安定である。三木氏はレー

二の首に鈴をつけることができますか。

こういう唯物論の定義が公式的、抽象的、非現実的であり現実の唯物論（例えば三木氏の自称のそれ）には当てはまらないという非難は無意味である。いかなる具体的なる規定をとつても、それが専ら自然的存在の中から必然性をもって展開されたものとして考え得る場合にのみ、即ちそれが實際ありのままの発展を正しく反映している場合にのみ、それは唯物論的規定であるという意味において、この定義は一切の唯物論にとつて公式的にあてはまる。この唯物論的原理を別の『人間の存在と自然の存在との動的相関的關係』なる原理によつて置き変えるためには、右の公式的規定が当てはまらないような諸関係を三木氏は発見したとでもいうのだろうか。確かに。階級意識をも含む観念体がそれである。これらは『意識を以て外界物の模像または映像と見る立場からは到底答えられ得ないよう、に思われる。』ところが既にエンゲルスはフォイエルバッハ論の中で三木氏がくそみそにこき下した「抽象的唯物論」の方法に則つてイデオロギーを説明しているのである。例えば法律上政治上のイデオロギーは——『国家が（一定の歴史的條件から！）ひとたび社会に対立して一個の自立的権力となるや』生み出されたものである。国家が自立的に働く限りにおいて『職業政治家、国家法の理論家、私法の法律家』等社会と直接の接触を保たない人間の頭の中では、この事情が反映して、法的形式が経済的内容と独立的に進行する、と。こういうイデオロギーが変革せられ、国家が社会の派生であるという正しい認識が生れたのも亦一定の史的條件の反映としてである、即ち歴史の発展において大産業の確立以来社会が露骨な関係をもつて国家の運動を決定しはじめたときに人間の頭に乗った。フランス革命前後の時代を記述した歴史家の頭には国家的変動の中に自己を刻印した階級関係がいやでも反映せねばならなかった、と。階級関係はブルジョアジーとプロレタリアートとが発展したとき、社会的原因、経済的關係を直接的に表現し、最も諸他の關係の影響に曇らされていないこの二階級と直接の接触を保つ人間の頭には、経済關係に決定せられるものと映じた。——凡そこういう説明方法のどういふ点が三木氏の氣に喰わぬのか。

三木氏が右の如き説明方法が破綻を来すと『思われる』と言った『問題』は具体的にはざっと次のような滑稽な種類のものである。これが氏の『学問研究』の結果であるらしい。『ブルジョアもプロレタリアも自体においては一の同一の社会に住む人間である。しかるに何故にこの同じ社会に対して両者は階級的に異った、相対立する意識を所有するに到るであろうか。』

これは不思議な問題だ。意識は外界物の反映であるというとき、三木氏はどう感違いされたのだろう。前述の如く意識の内容は感覚——就中見聞——を通じて外界から頭の中へ移し入れられる——ということは既定の事実である。プロレタリアとブルジョアは同じ社会に住むにしても、違った部分、違った関係のうちに住む。工場でハンマーを握り、穴倉へ帰って行き、また団結的闘争の方法でのみ生活を守り得ている労働者と、黄金の運動の中を駆け廻り、社交クラブで談笑し、労働の掠奪の上に生活している資本家とが同一社会の成員である故をもって同一の感覚的印象を受けるといふようなことをどんな俗悪な唯物論者でもが言ったというのか。だからもしかか受動的感覚、従って部分的観察に満足することなく、研究者として積極的に一社会全体を認識しようとするとき、人々は社会のあらゆる部分を占有し分析しなければならぬ。そうすれば、研究者が最初どんな見解をもって臨んだとしても、結果においては社会全体が彼の意識の中に反映し来り、社会における労働者階級の地位も反映して来る。実際労働者階級の歴史的役割を闡明し、これをもって労働者階級を啓蒙した最初の人々は、その研究を広汎に展開することのできた学識あるブルジョア階級出身者であった。三木氏が『到底答えられないように思われる』といったのは、階級意識は一の同一の対象をそれぞれの立場にひきよせて解釈することから生れると思ひ違ひしたことから来ている、即ち彼は『何とか的統一』の一定の類型から生れた一定の『人間学的なるもの』を表象し、これをまさにかくの如き『立場』として提出している。とんでもない。階級意識は、人々の感性的活動と知的条件とに応じて、種々な程度上の差別があろうとも階級の客観的運動がともかくも歪められることなく反映する限りでのみ形成され

るのである。階級意識の發展はこの運動のます、ます、正しい、反映として現われてくるのである。三木氏の愚問は、第一に外物が頭の中に到達する、即ち外物を認識する一定の手續を分析し得なかつた点から由来している。認識とは自己の頭脳の精神的連鎖の中へ対象を摂取することである。精神はだが *tabula rasa* ではなく、認識の段階に於じて一定の運動形式をもっている。対象はこの形式に合致する限りでのみ精神の中へ反映する、そして対象の全き認識のためにはだから頭脳の方を種々なる方法で対象の運動に合致するように変革しなければならぬ。だから唯物論を意識的に採用するのでなければ、即ち自己の素朴な思惟によって、或いはまた自己が自己についていっている見解によって、対象を規定するのではなく、反対に、対象がそれ自身に具そなえている諸規定に何らかの仕方では思惟を適應せしめるという方法で認識を進めるのでなければ、吾々は対象を全然認識できないか、その一面をしか認識できない。だからいま、自然生長的に発達してくる階級意識は、階級相互の闘争において、階級の必然的な運動の一楔機一楔機が思惟の中へ否応なくブチ込まれることによって次第に形成せられるにしかすぎないのに反し、唯物論の基礎に立つマルクス主義は階級闘争の全條件を知悉ちしつしその必然的な運動に即して意識的に、思惟を行使することによって、運動の前途を予見し、歴史的使命を啓蒙しつつ、プロレタリアートを解放へと導くのである。——自然生長性と目的意識性とはこの事情あるが故にこそ、実践において現実的な統一を見出すのである。——いまもし『何らか人間学的なるもの』（対象の規定でなく対象を自己に即して引きゆがめるところの規定）がもしこの間にあって、何らかの地位を持ち得るとしたら、それは、せいぜい右の客観的運動の思惟への歪められざる到達に対する抵抗としての役割位であろう。吾々の意識はあらゆる偏見や憐れな影響によってたださえ充分に曇らされているのだから、今更そうした規定を立することによって、この曇りに学問性を附与したりする必要は少しもない。

さて、かくも、唯物論の方法に散々不満を並べる三木氏は彼の虎の巻即ち彼が現実の存在の組織の最も端初的な形態と規定した『何とか的統一』を用いて何をどう説明し得るつもりだったのであるか。

『人間は——と三木氏はいう——他の存在と動的相関的關係に立つており、他の存在と人間とは動的相関的にその存在において意味を実現する。存在は我々の交渉において現実的になり、そしてそれに即して我々の存在の現実性は成立する。』

存在が歴史的に実現する意味（乃至は、こういう意味での現実性）、これを説明することが三木氏には問題なのである。この場合三木氏の観念論は次の点に存する、即ち、彼にあつては、存在はそれ自身において与えられている規定性によって現実的ではなく、『人間の存在と自然の存在との動的相関的統一』の一定の歴史的形態の地盤において規定せられ意味づけられたときにはじめて現実的となるという点に存する。ところが唯物論の定義はこういう『何とかの統一』の上にはなく、自然的存在の上において与えられている諸々の規定を辿つて思惟を進めてゆく方法の表現なのだから、さてこそこの唯物論の定義が彼の目には抽象的、形式的、非現実的なもの、『現実』に対して意味を持たぬものと映じたのであろう。だが唯物論はかかるものとしてこそ現実的なのである。何故なら現実とは、自然的存在の中から展開し、その上のみ成立し発展するという理由によって、唯物論の右の方法のみが本来にありのままに現実性を捕え得るからである。唯物論にとつて問題となるのは、三木氏によって『何とかの統一』に附与せられた規定、意味、限界が、その自然的に具備している規定、意義、限界に合致するか否かにある。もし合致していなければ、彼は自己の世界観を自己が勝手に頭の中で構成した概念に基いて展開しようとしているのだということになる。この点の考慮なしに三木哲学が観念論であるか、唯物論であるかを争うことは無意味である。

『人間と自然との動的相関的統一』というのは客観的な範疇としては、即ち三木氏が自身で主張する如くマルクスの所謂自然と人間との間の新陳代謝（資本論を見よ）を意味するならば、即ち自然と人間との媒介を意味するならば、これは人間歴史の基礎として、即ち人間の全歴史の展開の根源として、あらゆる時代を通じて普遍的に見出

すことが出来る。科学としては最初経済学がこれを見出した後マルクスが唯物史観の出発点として、これをとりあげた。——蓋し、事物や出来事をそれが自然の諸条件の中から必然的に展開してくるがままの姿において把握しようとする唯物論的歴史観にとっては、それ以外にはあり得ないのである。そしてこの必然的な展開に沿って、人類史の発展と階級への分裂、階級相互の闘争とその止揚の諸条件と諸法則を明かにし得た限りにおいて、唯物論はプロレタリアートの闘争の指導理論となり得たのである。

ところで三木氏においてこの『統一』は、自然の中から展開して来たものか——否。それは、野蛮人にとって世界が自己の生産活動と相似の手続で産み出されたものであったように、根本的には人間の一定の交渉の仕方を前提として、それに応じて規定されて出てくるのだ。人間の交渉の仕方の一定の歴史的形態こそが、自然に規定されつつ『統一』から生れてくるのではないのか。否、却って、自然そのものはこの活動の規定を負うて現われて出て来た限りでのみ現実的なのだ。例えば自然の進化的見解は、自然そのものの時間的發展の規定の人間意識への反映として見らるべきでなく、実践的な、それ自身過程的な活動において存在と交渉するという一定の歴史的な交渉の仕方もった人間にとってのみ現実的理解であるところの、存在をそのゲネシスにおいて、過程に於て、歴史において見る『見方』としてのみ現実的意味を持つのである。こういう規定をもった歴史性が問題なのである、自然が自身において具有している歴史性。それは彼には全く問題とならぬ、というのは、彼によれば、それは「抽象的な、従って『現実』の歴史に対して無力な」規定だから。ところが、本当のことをいえば、自然は、それ自体の歴史性の故にこそ、自らと『動的相関的統一』を結ぶところの人間を生み出し得、この『統一』を通じて全人間歴史を發展せしめ得たのである。そして吾々にとっては、自然の歴史性の特殊化としてのこの人間歴史の歴史性（この歴史性はプロレタリアートの独裁を導く）こそが問題なのだ。自然自体の歴史性の無視は必然にこの歴史性の無視を結果する。これが自然と人間との媒介としてのみ意味をもった『統一』なる範疇が自己の意義、その限界と条件性を見忘

れ、全現実世界を自己を前提として再規定しようとしたことから結果した『現実的』帰結である。この『統一』は『現実』世界の総体を自己の上に廻転させながら自らは、人間の一定の交渉の仕方の上に立っている。だが自己の史的前提を抽象的、非現実的として考慮の外に置いた後で、この交渉の仕方は何の上に自己を立てることができるか唯一つの可能な解答は、曰く、三木氏の思弁の上に。そして、三木氏にとって種々な形態における『統一』——所謂基礎経験いわゆるを考案し、現実の歴史の諸様相を類別してそれらの各々に帰着せしめる事が問題だった。人間歴史の現実的な展開の把握それは彼の関知せざるところである。

- (1) 岩波講座『世界思潮』の三木氏の論文参照。
- (2) 当時『改造』三月号(昭和四年)であったかに、谷川徹三氏が三木氏を新人として紹介していた。氏の三木氏評は極めてうがっている。そこには佐伯氏のこととも言及されている。
- (3) デカルト。
- (4) スピノザ。
- (5) フランス唯物論者。
- (6) マルクス。
- (7) 経験論の結論としてのヒューム。この蒸し直しがマッハ哲学。
- (8) デカルト。
- (9) スピノザ。
- (10) フランス唯物論者。
- (11) 従来唯物論。
- (12) マルクス主義的唯物論。

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。